自称謙遜家は実際に謙遜家か

―謙遜の評定における匿名性の影響―

津田　恭充
愛知学泉大学

Are Self-Appointed Modest People Actually Modest?

The Effect of Anonymity on the Evaluation of Modesty

Hisamitsu Tsuda

キーワード：自己卑下呈示　self-effacing presentation、匿名性　anonymity、スノーボールサンプリング　snowball sampling

1. 問題

人は、社会生活を営む上で、自分にとって望ましい印象を他者に与えるための行動をしばしば行う。こうした行動をまとめて自己呈示と呼ぶ。自己呈示は、自分を肯定的に見せる自己高揚呈示と、自分をあえて否定的に見せる自己卑下呈示とに分けられる。栗林(1995)や相川(2003)によると、自己卑下呈示の仕方には2種類ある。ひとつは、実際に自己の能力や遂行水準が低いため、それを自ら表明することで他者からの非難をかわし、「正直者である」などの肯定的な評価を引き出そうとする方法である。もうひとつは、実際には能力や遂行水準が高いにもかかわらず、それを積極的に表明しなかったり、あるいは低い能力や遂行水準しかもっていないかのように振る舞うもので、これは謙遜と呼ばれる。

日本においては、自己卑下呈示や謙遜が美徳であることは広く認識されている。高価な手土産を持参しながら、「つまらないものですが…」と表現したり、否定しようがない事実であっても、褒められたときに思わず「とんでもない」と否定したりすることは、多くの外国人にとっては奇妙に感じられるとされるが、日本人にとってそれらはむしろ自然なやり取りである。吉田ほか(1982)は小学校2年生から6年生を対象に実験を行っているが、小学校2年生ですら自己卑下呈示者のほうが自己高揚呈示者よりも良い印象であると認知していることを明らかにしている。このことから、日本人は幼い頃から謙遜を社会規範として学習しているものと考えられる。

人々がいかなる自己呈示を好んで用いるかについては、文化差や使用言語の差が存在する。自己のどの側面を呈示するかによって違いはあるものの、一般的には、自己高揚呈示については日本人よりも欧米人が、自己卑下呈示については欧米人よりも日本人が頻繁に用いるとされている(Kitayama et al., 1997; Markus & Kitayama ,1991)。また、Leech(1983)は、語用論的な観点から日本語表現と英語表現の比較を行っており、日本語表現では英語表現よりも謙遜の公理が他の公理よりも強く働くことを指摘している。

以上のような自己呈示方略の違いを説明するためのひとつの枠組みとして、相互独立的自己観と相互協調的自己観[注1)](Markus & Kitayama ,1991)がある。相互独立的自己観は、欧米でより強くみられる自己観で、自己を他者や周囲のものから区別された実体としてとらえているのが特徴である。相互独立的自己観においては、自己は能力や性格などの個人的属性により定義される。一方、相互協調的自己観は、日本をはじめとしたアジアでより強くみられる自己観で、自己を関係志向的な実体としてとらえているのが特徴である。相互協調的自己観においては、自己の定義はその場の状況や周囲の人間関係によって異なる。具体的な行動レベルでも、集団の協調が重視され、対人関係の維持が個人の成功よりも重視

される(Nisbett, 2003)。そのため、自己の優位性を強調し、その意味で周囲から独立した自己を表明することになる自己高揚呈示は相互協調的自己観にそぐわない。したがって、自己高揚呈示よりも謙遜や自己卑下呈示が好んで用いられるというわけである。ただし、欧米において、自己高揚呈示こそが他者の賞賛を引き出す望ましい自己呈示のあり方で、自己卑下呈示（および謙遜）はわざわざ自分の無能さをさらけ出す愚かな行為であると常に認知されているかというとそうではない。欧米においても、自己の成功を才能などの内的・安定的・統制不可能で望ましいものに帰属した場合には、他者から傲慢であると認知される傾向がある(Hareli & Weiner, 2000)。また、謙遜は単なる恥や自尊心の低さとは異なるものとみなされている(Exline & Geyer, 2004)。実際に、欧米のスポーツ・科学・芸術分野での成功者のインタビューを見てみると、謙遜表現を容易に見つけることができるだろう。

以上のように、謙遜はアジア（特に日本）において頻繁に用いられる自己呈示であるが、その使用頻度には個人差が存在する。その個人差を測定するための最も簡便な方法は自己評定式の質問紙調査で、代表的なものには、NEO-PI-R(Costa & McCrae, 1992; 下仲ほか, 1998)がある。NEO-PI-R はパーソナリティの 5 因子モデルに基づく検査で、謙虚さないしは謙遜傾向は 5 因子の中の「調和性」として位置づけられ、具体的には「調和性」次元の下位次元である「慎み深さ」として測定される。ただし、自己評定式の質問紙調査には、回答者が意図的に回答をゆがめることができるという一般的な問題がある。とりわけ謙遜のような自己呈示に関わる行動傾向についてはこのことが大きな問題となりうる。例えば、Schimmel(1992)が述べるように、謙遜が美徳とされるような社会においては、他者から見たら謙遜家でないにもかかわらず、自己評定式の質問紙では謙遜家であるかのように回答し、手軽に社会的肯定感を獲得しようとする人が出てくるかもしれない。反対に、一部の謙遜家は、謙遜家であると表明すること自体にもためらいを感じて、他者からは明らかに謙遜家であると認知されているのに、自分では謙遜家ではないように回答するかもしれない。謙遜を測定するにあたってこうした可能性が考えられるものの、日本においてはこのことを扱った研究は皆無である。そこで、本研究ではこの問題に関する初歩的検討として、自己評定で回答してもらった謙遜傾向と、近しい他者から評定してもらった謙遜傾向の関連を調査する。また、自己評定においては匿名性が確保された状況とそうでない状況で回答をする場合の 2 群を比較し、匿名性が自己評定に与える影響も検討する。謙遜の自己評価に上述したようなバイアスがかかるとすれば、非匿名条件で回答した場合は匿名条件で回答した場合よりも、謙遜の自己・他者評定間の相関が低くなる可能性がある。

2. 方法

(1) 調査対象者

自己卑下傾向や謙遜傾向には性差が見られるという報告(吉田ほか, 1982)もあるが、本研究は嚆矢としての研究という側面があるため、研究計画の単純さを優先し、女性に限定して調査を実施した。調査対象者は女子大学生 189 名であった。このうち、自己評定の回答に不備があった 4 名、他者評定のインフォーマント不足や回答の不備があった 36 名を除いた 149 名のデータを分析に用いた。その内訳は、匿名群 59 名、非匿名群 90 名であった。また、再検査信頼性の分析には 115 名（匿名群 34 名、非匿名群 81 名）のデータを用いた。

(2) 調査内容

1）謙遜（自己評定）

日常生活で友人と話しているときにどの程度謙遜するかどうかを測定した。項目は村上・石黒(2005)を参考に作成した。具体的には「友達と話すとき、自分の良い面については遠慮しながら話す」「友達と話すとき、自分が得意なことは、相手に聞かれるまで言わない」「自分が成功したとき、どんなにうれしくても、友達には控え目に伝える」「友達といるとき、本当は自信があっても、自信を前面に出さないようにする」「友達に褒められたとき、素直に喜ばずに一度は否定する」の 5 項目である。調査対象者には、「1.まったくそうしない」「2.まれにそうする」「3.しばしばそうする」「4.ほとんど常にそうする」の 4 件法で回答を求めた。調査用紙には個別の識別番号が振ってあり、後述の他者評定との照合が可能になるようにした。また、再検査信頼性を求めるため、3 週間後に同様に調査を実施した。

2）謙遜（他者評定）

自己評定の調査対象者に他者評定用の調査用紙一式を配布し、スノーボールサンプリングを用いて他者評定のインフォーマントを集めた。このとき、信頼性を高めるため、3 名以上 10 名以下のインフォーマントに協力してもらうよう依頼した。また、インフォーマントには、自分のことをよく知る同性の友人を選択するよう依頼した。調査用紙には識別番号が振ってあり、自己評定との照合が可能になるようにした。

本研究では、謙遜の定義を示した上で、評定対象となる人物が普段どの程度謙遜をするかどうかを 1 項目で直接尋ねることにした　その理由は、攻撃行動などとは異なり、謙遜は送り手にとっても受け手にとっても特別意識されることの少ない自然な行動であり、細かい行動の想起を求めても正確な回答が得られない可能性があると考えられるためである。具体的には、「謙遜とは、他者から褒められたときにそれを否定する行動を表します。この紙をあなたに渡した友達が、普段どのくらい謙遜をするかを思い出して、最も近いものを選んで○をつけてください。わからない場合は「わからない」に○をつけてください」との教示文にしたがって、「1.まったく謙遜しない」「2.まれに謙遜する」「3.しばしば謙遜する」「4.ほとんど常に謙遜する」の 4 件法で回答を求めた。

3）匿名性の操作

謙遜（自己評定）では、回答時の匿名性の影響を調べるため、匿名性の操作を行った。質問項目自体は匿名条件も非匿名条件も同一であったが、匿名条件では調査用紙を自宅に持ち帰ってもらい、後日、専用のポストに記入済みの用紙を各自で提出してもらうことで匿名性を確保した。一方、非匿名条件では調査用紙に氏名を記入してもらったうえで、教室内で一斉に回答してもらった。

3. 結果と考察

はじめに、5 項目で測定した謙遜の自己評定の内的整合性を調べるためクロンバックのα係数を算出した。その結果、一度目の自己評定ではα=.76、二度目の自己評定ではα=.73 であった。また、時間的安定性を調べるため、一度目と二度目の評定の平均値について t 検定を行ったところ、有意差はみられず(p=.78)、時間的安定性を有していることが示された。また、自己評定、他者評定ともに天井効果や床効果はみられなかった。Table 1 に評定方法ごとの主な記述統計量を示した。

Table 1　各評定方法の記述統計量

		N	M	SD
自己評定（一回目）	匿名条件	59	2.81	0.69
	非匿名条件	90	2.79	0.59
自己評定（二回目）	匿名条件	34	2.84	0.56
	非匿名条件	81	2.80	0.47
他者評定	匿名条件	59	2.57	0.52
	非匿名条件	90	2.66	0.63

次に、本研究の主たる目的である、各評定方法における謙遜の関連を調べるため、ピアソンの積率相関係数を算出した(Table 2)。二度の自己評定間の相関は非常に高いが、自己評定と他者評定の間の相関も全体的に高く、中程度以上の相関を示した。このことは、謙遜の測定において、自己評定でもある程度は他者評定に近い測定が可能であることを示しており、自称謙遜家は実際に他者から見ても謙遜家であることを意味している。とりわけ、匿名条件では自己評定と他者評定の間の相関係数が r=.72 および r=.70 と非常に高い値であった。匿名条件では、社会的望ましさの影響を非匿名条件ほど受けずに自己評定を行ったため、他者から見た客観的な謙遜傾向に近い評定となった可能性が考えられる。ここで、匿名条件と非匿名条件の自己・他者評定間の相関を比較するため、相関係数の差の検定を行ったところ、p=.03（一度目の自己評定を用いた場合）、p=.14（二度目の自己評定を用いた場合）であった。二度目のデータでは有意差が検出されなかったため、上述の可能性を積極的に認めることまではできないが、回答に際して匿名を保証された状況ではより客観的な評定を導くことができる（自称謙遜家が実際に謙遜家であると評定される）ことが示唆された。

本研究では、自己評定について、謙遜家でないのに謙遜家であると回答する者と、謙遜家であるのに謙遜家でないと回答する者を区別していないが、こ

Table 2　評定方法間の積率相関係数

	①	②	③
①自己評定（一回目）	－	.75**	.48**
②自己評定（二回目）	.73**	－	.49**
③他者評定	.72**	.70**	－

**p <.01

左下は匿名条件、右上は非匿名条件のデータ

れらをうまく弁別することができれば、今回の結果をより明確にすることができるだろう。また、それによって謙遜をより正確に測定することができるようになるだろう。

本研究では、誰が謙遜を評価するのかという評定者の問題と、自己評定の際の匿名性の影響に焦点を当てた。その結果、自己評定と他者評定の相関は中程度以上であり、自己評定でもある程度の妥当性をもって個人の謙遜傾向を測定できることが示された。特に、匿名性が確保された状況では、より他者評定に近い自己評定となることが確認された。つまり、謙遜のような社会的望ましさの影響を受けやすい変数であっても、調査方法によっては他者評定に近い回答を得られることが明らかになった。複数人による他者評定よりも、個々人による自己評定のほうがはるかにデータ収集の効率性が高いことを考えると、本研究のような試みは、調査実施上のコストを下げるための方法を開発するにあたっての重要な知見となりうる。

本研究には問題も残されている。それは、謙遜の送り手と受け手の関係性や、謙遜に対する価値観の影響の問題である。例えば、村上・石黒(2005)は、規範からの逸脱は社会からの拒絶をまねくため、規範に従った行動はそうでない行動よりも優位になると考え、(両者ではなく) 自分と相手のいずれかが謙遜を望ましいととらえていさえすれば謙遜が生じるだろうという仮説を立てており、実際にそのことを確かめている。また、大野(2006)は、謙遜の受け手の立場が自分よりも下である場合よりも同等以上の場合に謙遜が頻繁に用いられることを明らかにしている。この結果も村上・石黒(2005)と同じ観点から説明することができる。このように、謙遜が用いられるかどうかには、相手との関係性や謙遜に対する自己および他者の価値観などが複雑に影響している。本研究では、初歩的検討のために、友人同士という関係性に絞り、また、謙遜についての価値観については考慮に入れなかった。より正確な謙遜の測定のためには、これらについてもさらなる検討を加える必要がある。

もうひとつは調査対象者の属性に関する問題である。先行研究で謙遜の性差が示唆されているため、本研究では解釈のしやすさのために女子大学生のみを対象にした。そのため、男性でも本研究と同様の結果が再現されるかどうかは不明である。また、年齢も謙遜の認知にとって重要な働きをしているかもしれない。例えば、セルフモニタリング能力があまり発達していない児童では、謙遜の自他認知がほとんど関連しない可能性も考えられる。また、日本以外の国で本研究と同様の検討を行ったときにどのような結果が表れるのかは興味深い。これらは今後の検討課題である。

引用文献

1) 相川充 謙遜行動に及ぼす社会的スキルの効果に関する実験的検討 東京学芸大学紀要 1 部門, 54, 93-101(2003)

2) Costa, P. T. & McCrae, R. R. 『*Revised NEO Personality Inventory (NEO-PI-R) Professional Manual.*』 Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.(1992)

3) Exline, J. J., & Geyer, A. L. Perceptions of humility: A preliminary investigation. *Self and Identity*, 3, 95-114(2004)

4) Hareli, S., & Weiner, B. Accounts for success as determinants of perceived arrogance and modesty. *Motivation and Emotion*, 24, 215-236(2000)

5) Kitayama,S.,,Markus, H. R. ,Matsumoto, H., & Norasakkunkit, V. Individual and collective processes in the construction of the self: self-enhancement in the United States and self-criticism in Japan. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 1245-1267(1997)

6) 栗林克匡 自己呈示：用語の区別と分類 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）, 42,107-114(1995)

7) Leech, G. 『*Principles of Pragmatics.*』 London: Longman.(1983)

8) 吉田寿夫・古城和敬・加来秀俊 児童の自己呈示の発達に関する研究 教育心理学研究, 30, 120-127(1982)

9) 村上史朗・石黒格 謙遜の生起に対するコミュニケーションターゲットの効果 社会心理学研究, 21, 1-11(2005)

10) 大野敬代 謙遜表現の使用条件について 早稲田大学教育学部学術研究―国語・国文学編―, 54, 27-35(2006)

11) Markus, H. R., & Kitayama, S. Culture and the self:Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*. 98. 224-253(1991)

12) Nisbett, R. E. 『*The geography of thought: The geography of thought: How Asians and Westerners。think differently… and why.*』 London: Nicholas Brealey.(2003) (村本由紀子訳『木を見る西洋人 森を見る東洋人―思考の違いはいかにして生まれるか―』ダイヤモンド社(2004)
13) 下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山緑 日本版 NEO-PI-R の作成とその因子的妥当性の検討 性格心理学研究, 6, 138-147(1988)
14) Schimmel, S. 『*The seven deadly sins: Jewish, Christian, and classical reflections on human nature.*』 New York, NY: The Free Press.(1992)

注 1

相互独立的自己観と相互協調的自己観は相対的な概念である。したがって、ある社会においていずれかの自己観のみが共有されているということを意味しない。例えば、日本では相互協調的自己観が優勢であるとされるが、相互独立的自己観が存在しないわけではない。また、いずれの自己観が優勢であるかについては文化差だけではなく個人差も存在すると考えられている。

注 2

本研究は、科学研究費補助金（若手研究（B）、課題番号 25780432、研究代表者　津田恭充）の助成を受けた。